

透析室の長い午後

放射朗

人工透析という医療をご存知の方はむしろ少ないだろう。腎臓の機能が何らかの原因で働かなくなった人たちに対して、行われる医療措置のことである。

私は十年ほど前からこの医療のお世話になっている。それ専門の無機質な病院のベッドに、いつものように私は横たわる。

少ない人は二回の人もいるが、ほとんどの透析患者は週に三回、このベッドに四時間ほど縛り付けられる。

縛り付けるといっのはもちろん比喩だ。

文字通り縛り付けられるのは、頭がボケてしまって、ほうって置くと血管にさした管を自分で引き抜きかねない一部のかわいそうな人たちだけである。

週三回というのは、約一日おきに此処に来ないといけないということだ。最初は生活のリズムが狂い、うっとうしくてたまらないが、さすがに十年も続けると慣れてくる。

私の担当の看護婦、小久保さんがいつもの優しい笑顔でピ

ンクの白衣(ちょっと形容矛盾があるか?) のすそを翻しながらやってきた。

「山岸さん、体重は量りましたか」

小久保さんはいつ見てもかわいいなあ。

目がくりっとして、確か今年25才になると聞いたが、まだ高校生と言われても不思議に思わないだろう。色白だし、セミロングの髪をアップにとめて、ナースキャップを付けたそのうなじにはぞくっとする。

「山岸さん、体重は？」

おっと。いけない。ボーっとしてしまった。

「はい、六十四だったですよ」

彼女は個人台帳の方に目を移し、ちょっと顔をしかめる。

「少し増えてますねえ。あまりお水飲んじゃ駄目ですよ。それじゃあ、十三時スタートだから、二十分したらまた来ますね」

彼女は私を軽くたしなめると、カウンターのパソコンを操作しに戻った。

私たち透析患者は腎臓がストライキを起こしているから血管内の余分な水分をろ過する事が出来ない。

だからほとんど尿が出ない。

当然、飲んだ水は汗になって排出されなかった分が、次に透析するまでの間体内に残る事になる。その分体重が増える。

そして増えた分を次の透析の時差し引く必要があるのだ。

内シャントという特殊な血管を、私たちは前腕につくらされる。動脈と静脈を吻合して、血流を取りやすいように太い血管を作るために。

それをする、血圧の関係からか、細かった血管も日がつに連れ太く大きくなっていく。

最初はミミズが腕の中に入り込んだくらいのだが、十年も透析をしているうちに、ちょっとした蛇くらいの太さに育っていく。

一見醜いものであり、特に若い女性などでは気にする人が多いだろうが、この醜い蛇は私たちの命を守ってくれている愛すべき蛇なのだ。

そのシャントに、普通の注射針の何倍かの太さの針を入り口と出口の二本刺し、そして血液を抜き取り、機械を循環させた後また体内に戻す。これを約4時間続ける。

終わった後は血液が浄化されるから気分が良くなってしめるべきなのだが、急激な変化が、やはり心臓やその他の内臓にプレッシャーをかけるのだろう、ぐったりと疲れ果ててしまう。

中にはそのまま具合が悪くなって入院するはめになる場合もある。

つまり透析医療はまだまだ完成された医療とは程遠いという事だ。

私の隣の末吉じいさんを処置しに、小久保さんがまたやってきた。末吉じいさんとはもう六年間隣同士だ。私より十年長く透析をしているそのじいさんは年も八歳上で今年七十になる。

ちょうど七十の誕生日は友の会で何かしてあげたいな。今度の会合で提案してみよう。

末吉じいさんは昔船員をしていたそう。今でもベッドから正面に見える窓の外の海を眺めてはいろんな話をしてくれる。

これくらいの波の時が一番酔い易いのだよ。あまりひどくなると、酔っている暇がなくなるからね。

これくらい大丈夫と油断していると、いきなりぐえっと吐きそうになる。一人が吐けば周り中が吐き出す。

すっぱい胃液の臭いで伝染しちまうのだ。

そこまで聞いて、私はもう勘弁してくれと制止したっけ。あんた顔色悪いよ、なんてまったく鈍感なじいさんだ。

高台にあるこの病院の、数少ない良い所がここからの眺めだ。西向の窓は、夕日が射して、夏はブラインドが欠かせないが、海に落ちていく夕陽を眺めるのは心が休まる。

小久保さんが末吉じいさんの世話をしている。ベッドに寝ている患者を扱うから、上体がかがんで、腰を突き出す格好になる。ちょうど私の目の高さを彼女の丸いお尻が、右に行

ったり左に行ったり。

くびれた腰から張り出したヒップは、女性の魅力のもっとも集中した部分だ。

今日はTバックかな？ パンツの線が見えない。

私は左手に隠し持った手鏡をさりげないふりをして彼女のスカートの下にもっていく。やっぱりTバックだ。それも彼女のお気に入りの緑のやつだ。

なぜ彼女のお気に入りとわかるかというところ、彼女の好きな色が緑であり、このパンツは多分一枚しか持ってないからだ。何日かにいっぺんだけ見かける。

私はメモ帳に、Tバック・緑、と記入する。

今日はデートの日かもしれない。ここの事務員の下原という男と付き合っていると聞いた事がある。今日は勝負の日かもしれない。いいなあ若いつて。

今度は彼女のかわいいヒップをやわらかくさすってやる。ゴムまりみたいな弾力が手にかえってきて、嬉しくなる。「山岸さん。駄目ですよ」

彼女はそう言いながらも避けない。今、針刺しの大事なところだから、避けられないのだ。

でも彼女はそんなに嫌そうじゃない。別に嬉しくも無いだろうが、ある程度は仕方ないと割り切っているようだ。

私はそんな彼女が大好きだ。すぐに大声あげて変態呼ばわりする看護婦もいるが、そんなのに限って不細工な看護婦だ。間違っただけで、わざとじゃないのに、婦長に言いつけていたりする。悩み多き患者の数少ない楽しみの一つなのに、それを理解しないんじゃないあ看護婦失格というものだ。

しかし、右隣の裕子ちゃんが遅いな。いつもだったら、既にきていて、私とおしゃべりしているはずなのだが。

「裕子ちゃんはまだ来ないのかな」

私は背中を向けている小久保さんに聞いてみた。

「……彼女、先週亡くなっちゃったの。大学病院のほうで……」

振り向いて小さな声で小久保さんは言った。看護婦をしていれば、人の死に遭遇することは何度もある。

だが、それでも悲しい時は悲しいのだ。

彼女の目は何も言わないが、痛いほどその気持ちはわかった。

私の中にも切ない気持ちがかみ上げてくる。落胆とやるせない。目が熱くなり、涙があふれるのがわかった。

裕子ちゃんはまだ二十歳になったばかりだった。高校1年のときに慢性腎不全になり、2年後から透析を始めたと聞いていた。

私とは二年間あまり隣同士で、いろんな話をしたものだ。

先々週、彼女は落ち込んでいたっけ。彼氏が出来たのは嬉しいけど、こんな身体じゃ結婚なんて無理だと泣きそうな顔をしていた。

でも、それでもいいと言っていた。少しの間だけ、彼に結婚相手が見つかるまでの間楽しく遊んでくれればいい、そんなこと言っていた。

そして次にあった時、こぼれるような笑顔でこう言った。「彼、結婚しようだって。病気なんて持つてる人は誰でも持つてる、子供が生めなくてもいい。二人で楽しい家庭をつくらうって」

そうだ。彼女は幸せの絶頂だったのだ。

幸せの絶頂を突き抜けてそのまま天国に行ってしまった。

人工透析は先程も書いた通り心臓に負担がかかる。

もことから心臓が弱い彼女のような人は、前回元気にしていても、急にいなくなってしまう事がたびたびあるのだ。

大した理由も無く、まあ本人には重大なのだろうけど、自殺する若い人が多いのに、片方ではこうやって幸せをつかみ損ねて死んでいく若い命もある。

できることなら代わってやりたかった。その代償なんて、一度お尻触らせてくれるだけで充分だったのに。

「じゃあ。山岸さん針刺ししますよ。今日はちょっと痛いかもしれないですけど、痛かったら罰が当たったって思ってくださいね」

小久保さんがそう言って私の腕を取った。

ピンクの白衣（やっぱり形容矛盾だよなあ）の胸元から滑らかな肌が谷間を作っているのが少し見えた。

ちくりと、痛みがやってくる。透析用の針は普通採血用の針の何倍も太い。

だから痛みも大きいのが、しょっちゅうやられているので我慢する事は難しくはない。

私の身体からどす黒い血が抜き取られて、機械のポンプの中を循環する。

そして毒気を抜き取られた新しい血が再び帰ってくる。

透析はいつも同じベッドであるから、隣同士になった人は何年もの付き合いになる。

そうして私は幾人かの友人を作ってきた。

裕子ちゃんもその一人だった。

週に三回、四時間ずつ、世間話をしたり、相談事を持ち寄ったり。

出会はたくさんは無い。だから別れもたくさんは無いのだけど、普通の場合と違って、ここでの別れはそのまま生死の別れになる事が多いのだ。

透析が始まって二時間ほど、ちょうど折り返し点に差し掛かったあたりで、丸谷婦長がやってきた。

私に何か話があるようだ。

彼女はまだ四十歳になっただけ。

痩せ型の彼女はどことなく陰険な目つきをしている。実際

あまり患者の間では評判は良くない。

しかし権謀術策にすぐれでもしないと、この若さで婦長になるのは無理というものだ。陰険なのは当然だ。

「山岸さん。ちょっといいですか」

いいも悪いも無い。こっちは逃げる事も隠れる事も出来ない状態だ。

「山岸さん、看護婦のお尻触るの止めてくださいね。ここはそんなサービスはやってないですよ、残念ながら」

少し世間話をした後で、丸谷婦長は切り出した。

とても残念そうには見えなかった。

「わかりました。注意します」

他にどういいう言い方があるだろう。私は素直に反省するふりをした。

「小久保さん、山岸さんの担当かえてくれって言うてきたんですよ。もう我慢できないって。一応私から言うておくから我慢してと言っときましたけど」

丸谷婦長の最後の言葉は私の心にズンとカウンターパンチのように決まった。

あの小久保さんが婦長に告げ口するとはあんまりだ。

信じていたのに。

私は去っていく丸谷婦長を見送りながら、発作的に血管に射してある管を引き抜きたい衝動に駆られた。

でも途中で止めた。

そんなことをしてみても何も意味がないのがわかってい

るからだ。次から別の病院に変えようかな。

ため息しか出てこなかった。

そうするうちに透析時間が終了に近づいてきた。

針を抜くとき小久保さんと顔を合わせるのが嫌だ。

何かいやみを言ってしまうそう。彼女は悪くないのだが、それはわかっているのに嫌がらせをしてみよう。

小久保さんが私の針を抜きに来た。彼女はいつもと変わらない笑顔だった。私と目を合わせても、普通に笑いかけてくる。

ちょっと変だ。私はそれとなく彼女に聞いた。

「婦長と何か話したの？」

彼女は何の事かわからないようだ。

「婦長から何か言われたんですか？ ひょっとしてお尻触るなとか？」

少して考えて、彼女が言った。

「そのとおりだよ。君が苦情を持っていったんじゃないの？」

私の腕に針を抜く痛みが走る。四時間も刺したままだから、抜く時は皮膚が引きつって、刺す時よりも痛い事がある。

「丸谷婦長、早くも更年期障害が来てるらしいんですよ、普段でもきついのに、ますますわけわからなくなっちゃって。

私は別に何も言っていないですから。だって、山岸さんの触り方お上手なんですもの、全然嫌じゃないですよ。でもあまり人前では止めてくださいね。変に思われますから」

やっぱり小久保さんは天使だった。

私はこのまま死ぬまでここで透析を受けてもいいと思っ
た。

私の処置が終わり、私が帰り支度をしていると、右隣の裕
子ちゃんのベッドに、小久保さんに連れられて、若い女性が
やってきた。

「今日からこのベッドで、透析を始めます、藤木鮎子さんで
す。今日は十七時スタートだけど、次回から山岸さんと同じ
十三時スタートになりますから、よろしく願いますね」
小久保さんが、その女性を私と、反対側のお隣さんの岡本
さんに紹介した。

「藤木です。よろしく」

そう言ってぺこりと頭を下げる彼女は、裕子ちゃんと同じ
くらいの年齢か。

化粧はほとんどしていないのに、切れ長の目とすらりとし
た鼻筋は美女としか言いようが無い。

別れがあれば出会有いがある。

そして、また別れが来るだろう。

でも今度この美女と別れる時は、彼女が死ぬ時ではなく、
自分がこの場から消えるときでありますように。

私は一度背伸びをして、窓の外の遠い海を眺めた。

赤く焼け爛れた太陽が造船所の倉庫の影に入ろうとして
いる。

その造船所の高いクレーンの影が、真紅の海の上に乗っ
く線を一引いていた。

透析室の長い午後

終わり